三

四人が城壁を越えたのを確認した。杜遷が楊佶を見た。
「うまく脱出した。俺達も逃げよう」
「そう簡単に逃がしてくれそうにない」
楊佶が斧を振りながら答えた。
さきほどの廂軍とは、比べ物にならないほど訓練された兵だった。もっともここ河東路は、遼との国境が北にあり、中央や南の路とは異なり、廂軍も軍事訓練を受けている。冬教※なども必ず行われ、それによって民兵も精強だった。保甲※もしっかり残っている。さきほどの廂軍が情けないと、言えば言えた。

※冬教　農閑期の一ヶ月間受ける軍事教練。保甲制の団教の代わり。開封府、河北、河東、陝西の各路で行われた。

※保甲　民間人が国境警備や城郭の防衛に当たること。民兵組織。

「駄目かな」
杜遷が自信なげに呟いた。
「侠の皆も疲れている」
確かに動きが悪くなっている。倒れたまま動かない者も、六人ほどになっていた。心は痛んだが、後悔はしていなかった。
「皆、漢として立ち上がったことだ。死んだ者も、後悔はしていないだろう」
杜遷が静かに言った。
「まったく、侠というのは大したものだな」
楊佶が言った。
「楊都虞侯も、軍人にしておくには惜しい人だ」
「それだけ馬鹿ということか」
二人は声を殺して笑い合った。
残っている侠も、はじめの頃の勢いを失くしている。
「そろそろ限界かもしれん」

杜遷が、諦めたように呟いた。実際、宮城で戦い、南門まで駆けて来て、休みも取らずに戦いに入った。疲れないわけがない。それでも、侠達は一歩も退いていない。杜遷は、仲間の奮闘に頭が下がる思いだった。また一人、槍に横腹を突かれて倒れた。杜遷は胸が掻き回されるように感じた。

「私が突入する。その隙に、退却出来たらしてほしい」

楊佶が、大斧を頭上に掲げた。

「莫迦な。楊都虞侯は怪我を負っている。いつもの力を出せないのでは。ここは俺達に任せて、楊都虞侯こそ逃げてください」

杜遷が、遮るように言った。

「もともと、私達のしたことだ。あなた方に咎めはない。私達がけりをつけるのが道理だ」

楊佶は退かなかった。

「そんなことはない。俺達は好きで加勢してるんだ。宮城の衛兵も殺した。もう、立派な罪人さ」

「そうか、それなら仕方がない」

言うやいなや、楊佶が廂軍の真ん中に突入した。唸りを上げて、大斧が回転していた。五六人の兵士が薙ぎ倒される。後ろの兵達が素早く退いた。倒れた兵達は、ぴくりとも動かなかった。頭を潰された兵士もいる。

「どけ。禁軍都虞侯、楊佶の斧を喰らいたいか」

楊佶の叫びはわざとらしかった。そうして、大斧に対して恐怖を抱かせようとしている。また二人、兜ごと頭を潰した。わざと頭を狙っている。杜遷にはそう見えた。

杜遷も楊佶に続いた。三人が鼻を潰された。顔を押さえた手の間から、鮮血が噴き上げている。兵達はさらに後退した。杜遷も楊佶にならって、ことさら恐怖心を煽るような攻撃をした。

二人の周囲に、兵達の姿が消えた。

「まずい」

楊佶が呟いた。

唸りを上げて、矢が飛んで来た。
楊佶は総て落とした。
「杜遷殿、退こう。周りに味方がいなくなったので、奴ら矢を使い出した。これでは戦いようがない」
杜遷も焦りを感じていた。勢いに乗って廂軍の真ん中を割ったが、敵に包囲されたような形になってしまった。乱戦では使えない弓矢も、これでは、使ってくださいと言っているようなものだった。
次々と矢が射込まれて来た。侠達もそれに気付き、数人が楊佶と杜遷を助けに来たが、たどり着く前に、矢の標的になって倒れる。
「しまった」
矢を落としながら、楊佶が歯噛みしていた。
「抜けられそうにない」
杜遷も諦めかけていた。雨のように矢が降り注いでいた。杜遷は凄まじい速さで棒を回し、矢のことごとくを払っていた。
杜遷の背後で呻き声がした。振り向くと、楊佶が膝を折っている。楊佶の左膝に、矢が突き立っている。
「楊都虞侯」
杜遷が楊佶の名を呼び、覆い被さるように棒を回した。
「杜遷殿、私に構わず逃げてくれ」
楊佶が言った。
「そんなこと出来るわけがない。ここで戦って果てるのも、何かの運命、そう覚悟してますよ」
杜遷は無理に笑った。左肩に衝撃を感じた。
「うおお」
杜遷の雄叫びが、城壁にこだました。
その時だった。突然、矢が止まった。
兵達の後方で、騒ぎがあったようだった。前方で矢を射ていた兵達も、一斉に後ろを振り返っている。
石が飛んで来ているのが見えた。後方の兵達が、霰のように飛んで来る石を避けて、南門の方に散っていくのも見えた。

「何だ」
杜遷が呟いた。左肩に突き立っている矢のことも忘れた。侠達も、黙って成り行きを眺めているだけだった。
「どうした。何があった。散ってはならん。包囲を解くな」
廂軍の隊長が、声を張り上げている。だが、混乱は廂軍全体に広がっていた。
「何があった」
楊佶の声だった。
「分からない。いきなり奴ら、崩れ出した」
杜遷にも、何があったのか見当もつかなかった。
兵達の散った後に、大勢の人間が近づきつつあった。ゆっくりとではあるが、強い意志の感じられる歩き方だ。
女もいる。子供もいた。背に赤子を背負った女もいる。手に手に、斧や天秤棒を持ち、中には牛刀※を握っている者もいる。石は子供達が投げたようだ。身体の大きな子供が石を投げ、小さな子供は麻布に石を入れてつき従っている。※牛刀　牛を解体するための幅広の刀。
「こりゃあ……城郭の民じゃないか……」
杜遷が呆然とした口調で呟いた。
廂軍の隊長は、気圧されたような顔つきをしている。
民衆の中から、一人の老人が前に出て来た。おぼつかない足取りではあるが、目はしっかりと廂軍の隊長を見据えていた。
「おまえ達」
老人が口を開いた。小さな身体のわりに、その声はよく城壁にこだました。隊長が怯むのが分かった。
「儂ら民から搾り取った金で雇われておるくせに、儂らのためになることは何一つせん。そのくせ、罪もない宋家村の娘を殺そうとしておる。おまえ達は、本当にあの娘が罪人だと思っておるのか。恥を知れ。罪深きはどっちだ。宋家村の娘か、黄文柄か。おまえ達は知っておるくせに、金のため、欲のためにばかり動いて、人としての大切なものを捨て去っておる。もう儂らは我慢出来ぬ。これまでのことは、もう

十分見させてもらった。大勢で宋家党の者達を殺そうとしていた。健気に抵抗する者達を、大軍で執拗に追い詰めた。もう、黙って見過ごすわけにはいかん。儂らの日頃の恨み、その身体に思い知らせてくれる」

隊長が何か叫ぼうとした。子供の一人が、その口に向けて石を投げた。石は正確に隊長の口に当たった。血を吐いて隊長は下がった。

「おまえ達は、遼兵が来たと時には尻尾を巻いて逃げ隠れしていたくせに、遼兵がいなくなった途端、大きな顔をして俺達の家の中を荒らしまわったじゃないか」

「そうだそうだ。遼兵は、俺達の身体どころか、家にだって傷一つつけなかったのに、金目の物を奪ったり、俺達を追い回したのはおまえらじゃないか」

「強い者からは逃げ回り、あたしら女子供にはとことん苛めにかかる。ほんとにあんたらは男かい。玉をぶら下げているのかい」

「おまえらが兵士だというんなら、この人達と同じ数で勝負すりゃいい。こんな大勢でかかるなんて、卑怯としか思えねえぜ」

「こんなことは、はようやめるのじゃ。おぬしらの母御が悲しんでおるぞ。無体なことはやめるのじゃ」

人々が叫んでいた。子供達が、一斉に石を投げた。何十という飛礫が、廂軍の兵達を襲った。盾で防いだ兵もいたが、多くは顔や手に当たって、血を流す兵が続出した。雨でぬかるんだ路を、兵士達は我先にと逃げ出して行った。

隊長だけが取り残されている。老人が隊長の前に立った。

「おまえは、兵の訓練だけはしておったようだな。だが、儂は聞いておるぞ。随分とあこぎなことをして、賄賂を貯めこんだそうだな。泣かされた民が大勢おる。生きておっても害にしかならん。おまえの家族には可哀想だが、これも自業自得だ。死んで詫びをせい」

老人が、牛刀を持った男に合図した。

「やめてくれ……頼むからやめてくれ。分かった。俺が悪かった。金は全部差し出す。だから、お願いだからやめてくれ」

「そんな言葉を聴いてやったことがあるか」
老人が冷たく言い放った。
隊長は右手を出して、老人に掴みかかろうとした。
牛刀を持った男の身体が動いた。
隊長の右手の、肘から先が消え失せていた。肘から、二筋の血が間欠的に噴き出している。
隊長の絶叫が城壁に響いた。牛刀が横に動いた。首の半ばまで牛刀が喰い込んだ。
「なかなか首は落とせませんぜ」
牛刀の男が言った。
「これでいい」
老人が静かに答えた。
雨上がりの南門を、沈黙が支配していた。
それを破ったのは杜遷だった。
「ありがとうございました。危ないところを助けていただきました。この御恩、忘れるわけにはいきません」
拝礼する杜遷に向かって、老人が微笑みながら言った。
「よいのだ、侠の頭。侠達は、蔭となり日向となって民を助けてくれた。役人や軍人の横暴から、これまで多くの民が救われてきた。これは、その恩返しのようなものだ。嵐の中とはいえ、やつらの大声は聞こえていた。黄文柄は死んだそうではないか。まさに天罰だな。そこの楊都虞侯も立派だ。そんな人間を見捨てるに忍びない。そうした思いで、こうして皆集まって来たのだ。恩に感じる必要はない。これまで儂らが受けたことに対する、ささやかな恩返しと思ってくれ」
杜遷と楊佶は顔を見合わせた。お互いにほっとした顔をしているのだと、杜遷は思った。爽やかな風が、杜遷の心の中を吹き抜けた。
侠でいてよかった。杜遷は、心の底からそう思った。

・・・・・

砦に着くまでに禁軍兵士に出会うことはなかった。山の麓では警戒が厳しかったが、山に入ってしまうと、ほとんど監視らしい体制がとられていないようだった。

もう、陽はすっかり落ちていた。小屋から漏れる灯りが目に入った。

三人は、ゆっくりと馬から降りた。

「曹瑛」

聞起が小屋から飛び出して来た。目には、うっすらと涙が滲んでいる。馬の気配を一番早くに察したのは、やはり聞起だった。

「聞起……」

曹瑛は、言葉が続かないようだった。

「曹瑛……。早く……早く入って」

聞起が促した。軽く楊林に目を遣ったが、何も言わなかった。公孫勝には、目で感謝を伝えた。

「さあ、曹瑛。皆のもとに」

公孫勝が、曹瑛の肩を押した。

曹瑛が戸を開けた。蝋燭の灯りが、曹瑛の目に眩しかった。

「曹瑛……」

雪華と黄玉が、ほぼ同時に声を出した。

「馬鹿……。こんなに皆を心配させて……」

雪華が牀から起き上がり、曹瑛を抱き締めた。黄玉も曹瑛の首を抱き締めた。

「あなたは……本当に馬鹿よ。もしも……もしも死んでしまったら……」

それ以上、言葉が出て来なかった。雪華と黄玉の目から、とめどなく涙が溢れ出している。曹瑛も泣いている。李逵をはじめ周りの者達は、かける言葉もなく曹瑛を見つめていた。ただ陳統だけが、ひっきりなしに涙を拭っていた。

「地会の星よ、よく戻ってきた。だが、もう危険なことは止めるのだ。皆がどれほど心配したか、おまえはよく噛みしめるとよい」

だが、九天玄女の声は優しかった。

「入雲竜、よくやった。して、時遷は」
公孫勝は、山の上の塘のことを話した。
「ほう、それは妙案だ。儂はすぐ向かうとする。岩が多いとなると、寇汪達では時間がかかるだろう」
李逵が公孫勝に言った。今日一日の激戦で、李逵も疲れきっているはずだったが、そんな素振りは全く見せていない。
「疲れてはいるだろうが、李逵殿、もうひとふんばりだ」
公孫勝が言った。公孫勝も疲れているはずだ。李逵は心の中で思った。これほど信頼に足る男はいない。李逵は、あらためてそう感じていた。
「それで、この若者は」
陳達が訊いた。
「私は楊林。錦豹子と呼ばれています。父は、都虞侯の楊佶です。太原府南門で、曹瑛殿を見かけ、父と二人で後をつけたのです。そして、黄文柄を殺す企てを聞き、加勢させていただいたのです」
「おお、ではあの楊佶殿の……」
黄玉が言った。
「父は、侠の方達と南門に残りました。私達を逃がすために」
楊林が下を向いた。誰も声をかけることが出来なかった。
「楊佶様と楊林様がおられなければ、あの企ては成功しませんでした。もちろん、生きて戻ることも」
曹瑛が、感謝を込めて言った。
「この者は星の仲間だ」
九天玄女が口を開いた。楊林を見つめている。
「地暗の星。黒き闇を照らす星だ。心配せずともよい。おまえの父は、まだ死ぬ運命ではない。いずれ再び、会うこともあるだろう」
楊林が、不思議そうに九天玄女の言葉を聞いていた。
「分からずともよい。玄女様がこう言っておるのだ。ただ、信じておればよい」
慰めるように、李逵が言った。

「父上から、あなたのことを聞いていた」
黄玉だった。楊林が、眩しいものでも見るように目を瞬かせた。
「あなたが黄玉殿。父から聞かされていました。人生最高の試武※だったと」※試武　武術家同士の真剣勝負。
楊林が、幾分興奮したように言った。
「そんな大げさなものではない。ただ、楊林殿が私達に心を寄せているとは聞いていました。曹瑛を助けてくれたことに感謝します」
黄玉はそう言って、楊林に拝礼した。
楊林は、慌てて黄玉に答礼した。
「楊林殿、曹瑛を無事届けてくださって感謝します。そして、わたし達は、楊林殿、あなたを歓迎します」
雪華が微笑みながら言った。その笑顔を見て楊林は、この人のためなら命をかけられると感じた。
「宋家党に、いつかは加わりたいと思い続けてきました。こうして、皆様にお目にかかり、自分の想いが間違っていなかったことが分かりました。未熟者ですが、よろしくお願いします」
その楊林の言葉やしぐさが、いかにも若々しく新鮮だったので、李逵は思わず頬が緩むのを感じた。
「なかなかの槍の使い手だ。腕は私が保証する」
言ったのは公孫勝だった。
「公孫勝殿がそう言うなら、間違いはないだろう」
李逵が頷いた。
「楊佶殿も、息子には自信がおありだった」
黄玉だった。楊林は、ただ照れている。
「そろそろ、儂は塘に向かう。月も出ておるし、一刻ほどで着くだろう。後のことは、公孫勝殿、お願いする」
李逵の言葉に、公孫勝は黙って頷いた。
李逵が小屋を出ていくと、曹瑛が崩れるように雪華の牀に倒れ込んだ。黄玉が、慌てて曹瑛の身体を支えようとした。
「黄玉、いいの。疲れて眠ってしまっただけ。眠らせてあげて。優し

い曹瑛が、心を鬼にして人を殺しに行ったのよ。身体よりも、心がまいっているのよ。今夜はわたしが、ずっと抱いているわ」
雪華はそう言って、まだ乾ききっていない曹瑛の髪を撫でた。雪華の目には、うっすらと涙が浮かんでいる。
「黄玉、傷を診てみる」
公孫勝が、隣の部屋に黄玉を連れて行った。黄玉は、父に叱られる娘のように、神妙な顔をしていた。
「さすがの黄玉も、公孫勝様にはかたなしね」
雪華が笑いながら言った。
「あの戦いは、身震いするほどのものでした」
平真が、思い出したように言った。
「あれも黄玉。そして、これも黄玉なの」
雪華の言葉に、平真も肯いた。
塘で忙しく立ち働く者達を除いて、山の夜は静かに過ぎて行くようだった。

・・・・・

二日前に隆徳府※を過ぎた。目指す亀伏山は、太原府のすぐ南だという。※隆徳府　河東路の都市。東京開封府と太原府のほぼ中間にある。
「あと一日というところか」
今夜の野営地を定めると、呉秉彝は副将の陳隆に呟いた。
「将軍、お疲れでは」
陳隆が訊いた。
「いや、急いでいたわけではないので、疲れるというほどではなかった。兵達はどうだ」
「歩兵がやや。騎兵は、歩兵に合わせて行軍しましたので、疲れはないと思います」
陳隆はそれだけ答えると、足早に野営の幕舎を出ようとした。
「待て、陳隆」

呉秉彝が、陳隆を止めた。
「何でしょうか」
陳隆が振り返った。
「まあ座れ」
そう言われ、陳隆は差し出された凳に腰掛けた。呉秉彝がそんなことをするのは稀だ。
「陳隆、おまえは今度の命令をどう捉えている」
呉秉彝が真剣な顔で訊いてきた。
「どうとは……」
「なぜ、首都禁軍が出なければならないのだ」
「ああ、そういうことですか」
陳隆はとぼけた。呉秉彝は、有能な将軍ではあるが気が短い。不用意な返答は禁物だった。
「私は昨年将軍に昇ったばかりだが、先輩の将軍に訊いても、このような出動は記憶にないと言っていた」
「そうですね。私もあまり聞いたことがありません」
陳隆は、首都禁軍の段鵬挙将軍の下で、五年ほど副将を務めていた。呉秉彝につくのは初めてだ。もっとも、呉秉彝が軍を率いるのも、副将を持つのもこれが初めてのことだから、しっくりしないのも仕方がないと言える。
「太原府には六千の禁軍がいる。しかも、経略安撫使は名将の誉れ高い杜愔将軍だ。首都禁軍が出るいわれはない」
呉秉彝は、怒っているわけではなさそうだった。ただ、太原府近くの亀伏山に篭った賊を掃討せよと命令されただけだった。だが、ただの賊なら、太原府の廂軍で十分なはずだった。廂軍は実戦には向かないと言われているが、太原府は、北に遼国境の代州を抱えていて、他の所よりは訓練されているはずだった。それに、名将と謳われた杜愔が率いる地方禁軍もいる。これは、延安府、真定府、河間府と共に、相当強力な駐屯軍のはずだった。仮に廂軍で手に負えなかったとしても、杜愔の禁軍の一部でも出動すれば、それで解決するはずだ。開封

府禁軍が動く必要はない。そもそも禁軍は、帝のおわす首都を防衛するための軍のはずだった。地方軍閥を創らせない。それが、唐代から続いた節度使※の群雄割拠の時代を終わらせた、太祖趙匡胤からの方針だった。ただ、遼や西夏からの侵犯を防ぐために、国境近くの重要都市には禁軍の一部を配置していた。賊などそれで十分なはずだ。

※節度使　唐以前から地方の政治、経済、軍事を独占していた軍閥。宋の前、五代十国時代の戦乱の中心だった。

「おまえはそう思わないか」

陳隆は答えなかった。へたに同調して、言質を取られたくなかった。首都禁軍の中で生き抜くには、過激な言葉や上司の批判は厳禁だった。禁軍を改革しようとして、これまで多くの将軍や将校が罷免、あるいは辞めるように仕向けられてきた。そして、そうした者達は、いずれも有能で正義感を持ち合わせていた。陳隆には家族がない。ずっと軍の中で生きて来た。こねも金もないので、将軍に昇れるとは思わないが、せめてこの暮らしを全うしたい。そうは思っていた。だから慎重になる。そしてその慎重さが、上の者にとっては頼もしく映るらしかった。

「おまえは不思議に思わないのか」

かさねて呉秉彝が訊いてきた。

「どうでしょうか。念には念をいれる。そう考えて、太原府の知府は開封府に要請したのではないでしょうか」

陳隆は、当たり障りのない答え方をした。

「それだけで、首都禁軍が動くことはない。命令は童元帥から出ている、それを指示したのは蔡太師だ。何か、特別な事情があるのかもしれない」

呉秉彝は腕を組んで、考え込んでいる様子だった。

「太原府の知府の黄文柄は、蔡太師の家塾※の教師だったとか。そのために気がかりだったのでは」※家塾　有力者が家族のために作った学習塾。

陳隆が言った。確か蔡京の長子、蔡攸を教えていたはずだった。そんなことも、どこからともなく聞こえて来るのだった。

「蔡太師が、そんなことで動くことはないと思うがな」
「それでは何かわけがあるとでも」
ここからが慎重を要した。自分の意見を言わず、まず相手に話させる。そうすれば、相手の言葉に合わせて、いかようにも返答出来る。それも、当たり障りのない返答をだ。
「そこまでは分からん。だが、ただの賊ではなさそうだということは分かる。おそらく、遼とつながりがあるのかもしれん。太原府が遼兵に襲われたと、開封府で耳にした」
「本当ですか」
「ああ。先輩の将軍から聞いた。童元帥と蔡太師の話を盗み聞きしたらしい」
「大軍でですか」
「いや、数百人だったらしい。それが太原府駐屯禁軍を、文字通り粉砕したらしい。それで、蔡太師も真剣になったらしいのだ」
「今の遼軍に、そこまで強力な兵がいるのですか」
「いる。私は実際に見たことはないが、女真族の兵が西夏以上だという話だ」
「西夏兵よりも……。まさか、そんな軍と当たるわけではありますまいな」
「遼兵は、もう遼に戻っているらしい。遼兵がいなければ、太原府の禁軍が敗れるはずがない。我々は、その後詰といったところだろう」
「それでは手柄は立てられませんな」
陳隆は、現実的なところを突いた。
「そういうことだ。私も力が入らん。将軍になって初めての任務が、こんなつまらない仕事とは」
呉秉彝は、あからさまに不満を漏らしていた。陳隆は、苦い思いでそれを聞いていた。あんたはまだいいさ。こんなつまらない仕事を、こんな若造の新米将軍の下で務めなくてはならない、俺達将校や兵士はどこに不満をぶつければいいんだ。陳隆は、そう心の中で毒づいた。
「しかし、なめてかかっていいものではありません」

そうたしなめるのが精一杯だった。それ以上のことは言わない。それが、万年将校としての処世術でもあった。陳隆は既に五旬を越えている。もう、将軍に昇る夢は捨て去っていた。後は大過なく勤め上げて、老後の備えを充実させるだけだった。

「まあいい。それより、あの兵士達は何なのだ」

呉秉彝が、露骨に嫌な顔をした。

「あの百人ですか」

陳隆が問い返した。

「あんな者達が首都禁軍とは。私は情けない」

陳隆は答えるわけにはいかなかった。これは、童貫から直々に、陳隆が受けた命令だった。

「具足も武器もばらばら。おまけに言葉もひどいし、軍規など守る気もない。何故、あんな兵達が紛れ込んだのだ」

「それは……」

「あいつらは、正規の兵ではないだろう。私も将軍のはしくれだ。あのような兵がいるのは知っている。投降した賊や、落ちこぼれた侠の救済策だというのも知っている。だが、なぜそんな者達を連れて行かねばならぬのだ。足手まといどころではない。迷惑千万だ。正規兵にも悪影響を与えかねない」

呉秉彝が、吐き捨てるように言った。

「ですが、これも上からの命令です。呉将軍に、この者達の教育を任せたということでは」

真っ赤な嘘だった。童貫から受けた命令は、この兵達の抹殺だった。それも、出来るだけ自然なかたちでだった。確かに、投降した賊達を、何らかのかたちで遇さねばならないのは理解出来る。しかし、禁軍でそれを引き受けるということには無理があった。しかし、地方の廂軍では、もっと混乱することは目に見えている。廂軍は、使いものにはならないが、それでも民を受け入れている。世の中の騒動の元になる、浮浪者救済という名目があった。そんな中に、既に騒動を起こした賊を入れたら、どういうことになるかは、おおよそ想像がついた。賊を

していたくらいだから、腕の立つ者も少なくない。そんな者達をいきなり廂軍に放り込むのは、羊の群れに狼を放すようなものだった。かといって、まともな技術を持っている者はほとんどいない。そうした技術なり特技なりを持っていたなら、賊に堕ちることなどなかったとも言える。やはり、禁軍で引き受けざるを得ないのかもしれなかった。禁軍ならば、武力での横暴を抑えることが出来る。ただ、最近そうした賊達が増えすぎている。次から次へとそうした賊達が投降し、禁軍でも持て余しているのだった。そこで、こうした機会を利用して捨て兵にする。出来れば死んでもらう。

それが、禁軍上層部の考えたことだった。

「あいつらは、一体どこの賊だったのだ」

呉秉彝が、怒りを交えて言った。

「全員が賊だったわけではありません。中には、武挙を通っても家が悪かったり、言動に問題があったりとかで、そうした部隊に振り分けられた者もいます。賊だったのはおよそ半数、そうだったように思います」

兵達の名簿を確認するのは、副将の重要な役目だった。将軍にもなると、そうしたことからは無縁になることが多い。副将の下の偏将では、自分の隊の兵士しか知らない。

「それにしても、今度の奴らは質が悪い。私も運がないということか」

「将軍は忘れてください。あの者達は、私が何とかします」

陳隆が珍しくはっきりと言った。呉秉彝がほう、という顔をした。

「おまえがそう言うなら、私に異存はない。遠慮せずに使っていい」

呉秉彝が、さばさばしたように言った。知っているのか。陳隆は思った。知っていて、嫌な役目から自分を遠ざける。もしそうなら、なかなか侮れない将軍なのかもしれない。陳隆は、初めて警戒心をいだいた。

「明日には亀伏山に着く。地図は頭の中に入れておいたな。ここからなら、疲れないうちに着く。着いたらすぐ戦闘に入れるように。準備を整えておくように」

呉秉彝が高飛車に命じた。若造が。心の中で、陳隆は罵った。

・・・・

「開封府禁軍が、もうそこまで来ているって」

杜遷が大声を上げた。同時に立ち上がったので、痛みのために左肩を押さえて屈み込んだ。

「頭、怪我をしなさってるんだから、興奮しないでくだせい」

子分が、杜遷の身体を支えた。

「馬鹿やろう。こんなもの、怪我のうちに入るかい」

杜遷が怒鳴った。

「まあまあ、杜遷殿。まずは落ち着くことだ」

楊佶の声だった。左膝を矢で射られ、立つこともままならないようだった。傷が癒えるのには、時間がかかりそうだ。

「落ち着けと言われても……」

杜遷は気が気でないようだった。砦がどうなっているかは、部下がおおよそのことを報告していた。まだ陥ちてはいない。だが、苦戦している。複数の報告をまとめると、そんなところだった。ここに、開封府禁軍の精鋭が加わったらどうなるか。火を見るより明らかだ。

「我々には、もうどうすることも出来ない」

楊佶の声には、悔しさが滲んでいる。

「しかし……」

杜遷も苦しそうだった。

「頭、皆を集めましょうか」

子分が恐る恐る訊いた。杜遷は暫く考え込んでいた。

「そうだな。まず、人を集めることだ。いますぐ招集しても、今日中に集められそうなのは五百といったところか」

呟くように杜遷が言った。

「そのくらいでしょうかね」

「よし、おまえはすぐに仲間を集めろ。五百は集めるのだ。その後の

ことは、俺が考える」
子分は、脱兎のごとく外に飛び出した。じっとしているのが苦手らしい。
杜遷が楊佶を振り返った。
「楊都虞侯、何かいい手はないか」
杜遷の問いに、楊佶は首を横に振った。
「今度は、廂軍のようにはいかないだろうしな」
杜遷にも、いい考えは思い浮かばなかった。
「首都禁軍といっても、そう変わるものではない」
楊佶が、ぽつりと言った。
「おおそうか、楊都虞侯なら、そこのところは詳しいはずだな」
杜遷が乗ってきた。
「詳しくはないが、およそのことは分かる」
「で、どうなんだ。太原府禁軍とは」
「基本的には、それほどの差はない。太原府は、延安府や真定府と同様、国境地帯をかかえている。だから西京河南府や南京応天府などよりも、兵の質もいいし訓練も厳しい。何よりも、軍を統べる者が優秀だ」
「なるほど。河東路の最高責任者は、あの杜愔将軍だものな」
「だから、黄文柄のような知府でもやっていけた。それに、以前は代州に呼延灼将軍がいた」
「あの、双鞭呼延灼か。まだ若いのだろう。三年前に、秦鳳路に行ったと聞いたが」
「追い出されたのだ。代州の知府と通判が、遼との甘い汁を吸いたいがためにな」
「どういうことだ」
「遼は、時々代州雁門関を抜けて宋内で略奪をしたい。代州としては、自分の領内で乱暴を働かないことを条件に、これを黙認する。遼は、略奪したものの何分かを知府や通判に渡す。遼にとってもうまい話なのだ。何せ遼という国は、国土は広いが耕作に適した地は少ない。必

然、食糧が不足すると、宋から奪うしかなくなるのだ。本当は、自国の産業を発展させ、それによって交易をし、穀物などを入れればいいのだろうが、あの国では、そうした発想は乏(とぼ)しい。どうしても、奪うことを優先させる」

「そうかもしれないな。商人もいることはいるが、多くは漢人だというしな」

杜遷が大きく肯いた。

「呼延灼は、その代州を三千の兵で守っていた」

「代州には一万五千ほどの兵がいるのでは」

「残りの兵は、全く役に立たなかったらしい。三千は、呼延灼が鍛えぬいた私兵のようなものだ。この三千と呼延灼がいる限り、国境の治安はある程度保たれていた。呼延灼が蘭州(らんしゅう)に飛ばされてから、国境の治安が乱れ出した。宋家村を襲ったのははぐれ遼兵と言われているが、私は国境が乱れたことがその遠因だと思っている」

「というと、宋家村の事件も宋の責任だと」

「宋家村だけではない。遼との国境近くに住むすべての民にとってだ」

「そう言えなくもないがな」

「私が言いたいのは、開封府禁軍だから精強なのではなく、それを率いる将軍の資質こそが重要なのだということだ」

「分かった。将軍が誰か調べさせよう。呼延灼のような奴じゃないことを祈ろう」

「それほど優秀な将軍が来ているとは思えないが、調べておいて損にはならないだろう。私の知っている将軍なら、何か手を打てるかもしれない」

「楊都虞侯。あんたが味方になってくれて心強いよ」

「私なんか……」

杜遷の言葉に、楊佶は照れたようだった。

「それにしても、なぜ侠がこれほどまでに宋家党を」

楊佶が訊いた。

杜遷が、少し悔しそうな顔をした。

「本当は、もっと前に加勢すればよかったんだが。俺がぐずぐずしていたから、こんなにこじれてしまったのさ」
「そうなのか」
「俺はそう思っている。考えてもみなよ。宋家党がやっていること、あれはまさしく侠の精神じゃないか。俺は前からそう思っていた。特別助けを入れたわけじゃないが、かげながら応援してはいたんだ」
杜遷も楊佶も、すっかり打ち解けたのか、言葉に遠慮は見られなかった。
「私の息子も、宋家党の信奉者だった」
「楊林さんか。いい息子じゃないか。俺には家族がいないから、羨ましいくらいだ」
「曲がらずに育ってくれた。そうは思っている」
「あれだけの若いの、そうはいない。俺の後を継いで、侠の大立者になってほしいくらいだ」
杜遷の言葉に、楊佶は苦笑しただけだった。
「侠か。遥か昔から在る組織だが、不思議と言えば不思議な組織だ」
「弱い者が生き抜く知恵。そんなものかな。国が民を慈しんでくれたら、侠のような組織は必要ないんだが」
「それは無理だな。少なくともこの宋という国では」
「その国を守る側に、楊都虞侯はいた」
二人は口を開けて笑い合った。
「杜遷殿、今度は命がないかもしれんぞ」
楊佶の目は真剣だった。
「覚悟の上さ。連れて行くのも、胆の据わった奴らだけにする」
「そうか、私が口を挟むのも何だが、出来れば死なないでほしい」
杜遷は少しの間目を閉じていた。
「俺も死ぬ気はない。だが、身体を張らなきゃならない時には、迷うことはしたくない」
杜遷の声は、不思議と明るく楊佶には聞こえた。

・・・・・

李逵が塘に着くと、水を導く溝はほぼ掘り終わっていた。二百人とはいえ、さすがに土に慣れた農民だった。屈強な兵士といえど、ここまでの速さで掘り進むことは出来ないだろう。

先頭で鋤を振るっているのは寇汪だった。宋伸は堰を造る指示を出している。

寇汪が李逵の姿を認めた。

「あっ……」

寇汪は言葉を詰まらせた。

「いい。そのまま続けろ」

李逵の声に、責める色はなかった。

「無用様。俺は……」

「いいのだ。おまえ達が来てくれて助かる。礼を言う。そして、儂はもう無用ではない。李逵。銅堤山の黒旋風だ」

寇汪の顔が引き攣るのが分かった。

「気にせんでいい。今の儂は、銅堤山の黒旋風ではなく、宋家党の黒旋風だ。おまえ達と一緒だ」

「ですが、俺は無用様……いえ、李逵様の言葉に背いてしまった」

「儂の言葉が間違っていたのだ。おまえ達を漢と見なかった。おまえ達は、誰よりも漢だったのにな」

「李逵様……」

下を向いた寇汪の目から、とめどなく涙が溢れ出ている。

「さあ、明日の朝までに、この仕事を終えなければな」

李逵は、軽く寇汪の肩を叩いた。それを、何かいいたそうな顔で宋伸が見ていたが、結局何も言わずに堰を造ることに没頭し出した。

「李逵殿」

時遷の声だった。

「おお、時遷か」

時遷も鋤を握っていた。その姿が妙に似合っていたので、李逵は感

心した。間諜というものは、ここまでそのものに似せなければならないのかと、李逵は唸るような思いに駆られた。
「この塘は、自然の池を利用してますが、堰のところに岩を使ってます。これだけは、この道具では歯がたたない」
李逵は塘の全景を見た。一周二里半※ほどの小さな塘だった。もともとは、もっと小さな池だったのだろう。それを、土で堤を造り、堰となる部分だけ岩で固めたようだった。※二里半　約千二百五十メートル。
「あの岩か」
李逵が呟いた。
「あの大きな岩が、どうしても動かせない。堰を造った時には、山の上から落としたのだろう」
時遷の想像通りだろうと思えた。梃子を使って、山の上の岩を堰を造る場所まで導いたようだ。だが、一旦堰として嵌まり込むと、岩を崩さないかぎり動かせそうにはない。
「かなりの岩だな」
李逵が自信なさそうに言った。
「黒旋風でも無理ですか」
時遷の言葉に嫌みはない。
「だが、やらねばならんのだろう」
静かに、李逵が言った。
「これが成れば、おそらく戦いは終わります」
時遷が控え目に言った。
「そうだな。戦を終わらせんとな。このまま続ければ、やがては全滅だ。これ以上、死者を出したくないからな」
李逵は板斧を両手に握った。十二の時から使っている板斧だった。もう、自分の身体の一部と言っていいほど馴染んでいる。父が残した板斧だった。父は身体の弱い母を庇って、薬代を稼ぐために身を粉にして働いた。腕のいい石工だったので、いつの間にか、山で石を切り出す者達のまとめ役になっていた。李逵が十二の時、山で騒動がもち上がった。石工達の報酬が少なすぎると、疑問が出たのだった。父は、

取り仕切っている役人とかけ合った。それで、監督をしていた男が天引きしていたのが判明した。男は問い詰められても、違うと言い張った。石工達を代表して、父が交渉に当たった。男はなかなか認めなかった。次の日、山から崩れ落ちた石の下敷きになって、父は死んだ。家の中から、かなりの額の金が見つかった。男は、父が天引きしたのだと言いふらした。そんなこと、するはずがないと母が叫んだ。そんな金、見たことがないと、李逵も言った。だが、父という柱を失った石工達は、次第に監督の男に言いくるめられていった。一月もすると、すっかり父のしたことになっていた。母はある日、李逵が家に戻った時に死んでいた。鴨居にぶら下がった母の小さな身体を見て、李逵は力がほしいと痛切に思った。自分に力があれば、父を、母を失わずに済んだかもしれない。幼心にその想いが刻み込まれた。母を埋めて、李逵は放浪を始めた。持っていたのは僅かな金と、父の形見の板斧だけだった。

李逵は岩に向かって歩を進めた。岩は全部で六つあった。二つずつ積み重ねられ、隙間は粘土で固められている。

「これでは、鋤や鍬では歯が立ちそうにないな」

独り言のように、李逵が呟いた。

暫く、李逵は岩の表面を手で撫でたり、じっと見つめたりしている。

時遷は、黙って見守るだけだった。

「割れるか……」

李逵は、自らに問いかけているようだ。

「これは、半端な岩じゃない。出来なくてあたりまえだ。いざとなれば、火薬を使う手もある」

時遷が言った。

「火薬で割れるか」

李逵が訊いた。

「分からない」

時遷は、自信がなさそうだった。

「やってみる」

李逵が短く言った。岩の一番高いところは、およそ一丈※と思われる。※一丈　約2.2メートル。
「木の堰は大丈夫だな」
時遷が宋伸に訊いた。
「任せてください。はずしやすくはしてありますが、岩の堰の替わりは務まります。いつ水が来ても大丈夫です」
岩の堰を崩してもすぐ水が落ちないように、簡易だが頑丈な木の堰を、宋伸は築いていた。
李逵はもう一度岩を見詰めた。李逵の後姿を見ていて、まるで岩と語り合っているようだと、時遷は思った。
李逵が気を溜めている。
李逵の身体が、一回り大きくなったように見えた。
板斧が動いて、月光を跳ね返した。
左の斧が横に動いた。続けて、右の斧が縦に走った。音はほとんど立たなかった。
「ふう」
李逵が大きな溜息をついた。板斧はただ、月の光に揺れている。
「切れたのか……」
恐る恐る時遷が訊いた。切れるはずがない。そう思っている口調だった。
「やった」
ぼそりと、李逵が答えた。
李逵が、板斧の背で岩を叩いた。岩はゆっくりと、四つに割れ落ちた。暫く、誰も口を開かなかった。
「本当に……本当に切ってしまった」
時遷が呆然として呟いた。
二百人の村民が、一斉に喝采を上げた。
「李逵殿、これは……これは本当にすごい。とても、人の為せる技とは思えない」
時遷の言葉は震えている。

「儂も自信はなかった」
李逵が静かに言った。
「はじめは、父の顔を思い浮かべた。次に母の顔を。だが、それでも岩は切れそうになかった」
李逵の目は、静かに降り注ぐ月の光に向けられている。
「では、なぜ」
時遷が訊いた。
「最後に、嬢さんの顔が浮かんだ。その時、切れると思った」
時遷は、もう口を開かなかった。
穏やかな月の光を受けて、李逵の姿は、この世の悪を降(くだ)す不動明王(ふどうみょうおう)のように、時遷には見えた。